

平成 28 年 2 月 5 日、政策秘書課職員との話です。

## 多様性

2045 年には、人工知能が人間の能力を超えと言われていわれています。何でもインターネットで調べることができ、人間は何も記憶する必要がない社会になるかもしれません。

そのとき、人間はどうあるべきでしょうか。コンピュータにはない、コミュニケーション力や互いにを思いやる心、気遣いといった人間らしいところを伸ばしていく必要があるのではないかと私は思っています。そんな社会を迎える子ども達のために、私たち大人は、今、何ができるでしょうか。

教育委員のみなさんと教育について話し合っています。その中のキーワードとして、

- ・ 自然共生
- ・ 地域共存
- ・ 多世代交流

を掲げています。

このキーワード全てに共通することは、「多様性」です。

ボタン一つで、思い通りになることが多い中、自然は自分の思い通りにはなりません。地域には、実に多様な人が暮らしています。多様な人を認めるということは、「みんなが、かけがえのない大切な存在」であることを認めることです。一人ひとりが違うモノサシ（価値観）を持つことです。

これまでの学校は、キーワードにある自然、地域、多世代とあまり関わってこなかったと感じています。

自然を受け入れることは、わずらわしいことも受け入れると言うことです。異年齢で遊んだり、地域の人と交流したりすることで、子どもたちは、譲り合う心や我慢することなど、社会性を身に付けていきます。そういうことを通じて、子どもたちは多様性を学んでいくのです。

自分自身の中にある多様性を受け入れることも大切です。

ダメな自分をも認め、そのダメな自分も愛することができるようになると、私たちは、全ての人を「かけがえのない大切な存在」と認められるようになると思います。

教育について考えたキーワードですが、子どもだけのことではなく、社会全体の問題でもあると思いました。

自然も地域も、多世代との交流も、自分の思い通りにはならないものですから、お互いに受入れ、対応していくには苦労があるでしょう。わずらわしいことも多いでしょう。しかし、苦労を共にすることで、親しくなれます。役割と居場所、つながりは、苦労やわずらわしいことをあってこそ、得られるものなのです。

～市長の話を聞いて～

この話をしているとき、市長が「例えば校訓が『明るく』『元気』だったとする。でも、明るく元気な子ばかりじゃない」と言われました。私は「確かにその通りだ」と思いながらも、これまでそうした校訓に対し、何の違和感を持ったことはありませんでした。このように私たち大人は、無意識のうちに、子ども達を一つの枠にはめてしまっているのだと強く感じました。